

第7章

学校・教室以外の場における取り組み

デイ・キャンプの取り組みから

「中・高校生の吃音のつどい」の実践報告

デイ・キャンプの取り組みから

岐阜吃音臨床研究会 板倉寿明

1. 岐阜吃音臨床研究会の目的

岐阜吃音臨床研究会はその名のとおり、吃音の臨床について考える研究会である。この会の前身は「仲間とともに吃音を考える会」で平成12年に成人吃音者と吃音児の指導に関わる教師や幼児の施設の指導者らが集まって発足した。「仲間とともに吃音を考える会」が発足する発端となったのは、子どもの頃、吃音を一人で悩んだ成人吃音者の経験であった。この成人吃音者は人前でどもりたくない気持ちと吃音から派生する二次的な心理的負担を次のように述べている。

「私の小学校の時には学芸会のようなものがありました。毎年、劇を行うのが習わしで保護者も楽しみにしていました。田舎の小学校で一学年、一クラスの小さな学級では全員の台詞が用意してありました。人前でどもる自分を見せたくない、大勢の人の前でどもって笑われたくないと考えていた私は、配役を決めるときに先生に提案しました。台本にはない、背景の木という役を作り、その役をやりたいと言ったのです。しかし、あっさり却下されました。そこでまた、提案しました。じゃあお寺の場面で背景に描くことになっていた仏像の役はどうかと。なぜだかこの提案は通ることになりました。私は台本にはない、話さなくてもいい仏像の役を手に入れたのです。先生から「どもるのが嫌だからか」と聞かれたのですが胸の内を打ち明けることなく、とにかく仏像の役でいいとだけ言い張りました。私がどもることは親や先生には関係なくて私だけの問題なのだからほっておいてほしいと思っていました。このようにして、私は念願のセリフのない役を手に入れたのですが、とても落ち込んでいました。みんなが一生懸命練習しているのにせりふのないただ座っているだけの仏像の役は練習の必要がありません。練習をぼんやりながめる日が続く、つまらないなあという気持ちと同時に、私はやらなければならないことから逃げているという思いが強くなってきました。練習が白熱してくるにつれて、私は自分がどもる上に嫌なことから逃げる卑怯なやつだと思えてくるのでした。劇を見た母親から「どうしてあんな役なのか、どもるからか」と聞かれましたが、何も答えることはできませんでした。親や先生に心配かけることは申し訳ないようにも思っていました。また、クラスでも学校でもどもる人に会ったことがなかったので、私だけがどもってちゃんと話せないだめなやつだと劣等感にさいなまれていました。あの時、誰かに胸の内を打ち明けることができたなら「どもることはみじめでカッコ悪いこと」で「それをもつ自分はだめな存在」という固定した観念を別な視点から考えるチャンスが与えられることになったかもしれないと思います。しかし、誰にも話そうとしない私の悩みは内側でふくらむばかりで吃音は本当に劣ったものなのか、どもる自分はすべてだめな存在なのかなどと検証する機会さえ

ないのでした。大人の吃音者は言友会などのセルフヘルプグループで、仲間と抱えてきた吃音の問題を話すことで一人だけの個人的な悩みではないことを知り、今までの悩みが軽減して勇気づけられています。子どもたちはクラスでどもるのは自分だけと、一人で悩みを抱え込んでいるのではないのでしょうか。できるなら私の経験を子どもたちの役に立てていきたいと思います。」

この成人吃音者の自分一人だけが悩んでいないことを知る機会を提供したいという思いは、セルフヘルプグループで吃音とうまくつきあうという考え方の重要性を認識した成人吃音者の賛同を得た。また、吃音の言語症状に対して有効な手がかりがないままの吃音児の指導者にとっても、吃音を受容する支援の重要性は共感を呼んだ。このように成人吃音者と教師・指導者らの思いは一致し、子どものためのグループによる支援へと進展した。会の名称が示すように同じ思いや悩みをもつ仲間が集まっていっしょに考えるプロセスを問題解決の手段と考える会であった。

「仲間とともに吃音を考える会」は毎年2回、吃音をもつ子どもとその保護者を集めて「デイ・キャンプ」を実施してきた。会は平成13年に「岐阜吃音臨床研究会」と名称を変更し、指導者のための講習会、指導者のための勉強会、吃音相談会、と活動の内容を拡大した。平成18年現在、所属する会員は吃音児とその保護者、教師、指導者、成人吃音者で総勢50名ほどの研究会に成長している。

研究会は吃音の問題の解決あるいは軽減に対して、①吃音について正確な知識をもつ、②独りで問題を抱えない、③吃音を受容するという3点が重要であると考えている。すなわち、第一点目の、吃音について正確な知識をもつとは、吃音の原因が解明されておらず、本人が治そうと思っても治らないものであることを理解することをさす。また、吃音がでたか、でないか、吃音の程度が重いか、軽いかなどことばの症状にばかりとらわれることが、吃音児自身の自己の否定や行動の問題を大きくすることに気づくことが重要であると考えている。第2点目の、独りで問題を抱えないとは、吃音の問題は、自分だけが悩んでいるのではなく同じ悩みを抱える仲間がいて、仲間同士がその悩みを理解しあうことが大切であると考えている。これは成人吃音者のセルフヘルプグループが全国に存在し、その重要性が指摘されていることにも示されている。第3点目は、ことばの症状の改善に有効な手段が見出されていない現状では、吃音を受け入れるという考えをもつことが必要であることをさす。研究会ではこれを「吃音とうまくつきあう」ということばで表現している。

研究会では上記の3点について、吃音児・者だけでなく、吃音児の保護者や吃音児とかわる教師・指導者にも必要なことであると考えている。特に子どもの場合は保護者や教師・指導者が上記の3つを理解し、実践できることが重要である。研究会の活動を通して、親や教師・指導者は吃音に対して情報を得たり、他者の意見を聞くことで自分を見つめ直すことができる。そして、それぞれが誤解や不安を解消して、吃音を受容する気持ちに自信をもち、子ども自身が吃音を受容していく支えになれるであろう。吃音を受容する取り組

みは、家庭や学校で吃音が受容される環境を作るだけでなく、吃音を受容される社会づくりをも目指している。

2. 第11回デイ・キャンプについて

(1) デイ・キャンプの目的

吃音児のためのデイ・キャンプは午前中の活動と、午後の活動で構成されており、午前中はレクリエーション活動、午後には吃音についての話し合いが行われることが通常である。話し合いは、保護者、教師、指導者、成人吃音者などによる「大人のグループ」での話し合いと、吃音をもつ子どもたちの、「子どものグループ」での話し合いが平行して実施されることになる。

午前中の活動は参加者同士が親睦を深めることと、午後の話し合いが活発になるための仲間意識づくりの役割をもっている。午後の話し合いは悩みを話し合う活動であるため、楽しめる活動を通して、参加者の間に打ち解けた雰囲気形成しておくことは重要である。また、日ごろ、まわりとのコミュニケーションに消極的になりがちな吃音をもつ子どもたちに、ありのままの自分の姿でまわりと関わる経験をもたせることも、午前中の活動の目的の一つであった。

午後の活動には、次のような目的がある。大人のグループは、疑問や意見の交換を通して、保護者や教師・指導者が自信をもって子どもと関わるができるように支援することである。また、大人のグループに参加する成人吃音者は、吃音の体験を話す機会をもつとともに吃音を受容する気持ちを高めることを目的とした。子どものグループは、成人吃音者や自分の他にも、どもる子どもがいる安心感のなかで、自分の吃音についてオープンに語れる経験をもつことであった。また、仲間がいる場を提供することで、子どもの、どもるのは独りだけだと感じている孤独感と将来への不安感を軽減したいという願いも含まれた。さらに研究会としては、こうした話し合いを通して、保護者や吃音児が吃音をどのようにとらえているかを知り、支援の在り方を考えることも目的としている。

(2) 第11回デイ・キャンプの概要

平成18年8月27日に実施されたこのデイ・キャンプは、第11回目の開催であった。午前10時に全員での出会いの広場で始まり、午前中は手打ちそば作りと流しそうめん、午後には子どもと大人に分かれての話し合いが行われた。参加者は50名でその内訳は吃音児・者とその家族が8組、他にデイ・キャンプの企画に関わった研究会のメンバーや指導者、ボランティアである。この中には初めて参加した成人吃音者が2名、そして、参加が初めての指導者が5名含まれた。

(3) 第11回デイ・キャンプの様子

① 出会いの広場

出会いの広場とは、握手や挨拶、椅子とりゲーム、じゃんけんを利用したゲームなど、参加者同士が相互に交流できる簡単な活動を通して、初対面の参加者同士が知り合うきっかけを提供するものであった。これは、今後の活動のために、和んだ場の雰囲気づくりや交流意識の高揚の目的をもっていった。活動開始の当初は、大人は活動に消極的であったのとは対照的に、子どもの参加が積極的だったことが印象に残った。今回のデイ・キャンプでは吃音児の兄弟の参加も多く、大人も徐々に場に馴染んでいったように思われた。

② そば打ち体験と流しそうめん

例年、夏のデイ・キャンプはバーベキューを行ってきたが、今回は子どもたちがそば打ちの体験をした。そば打ちは奥が深く味を追求するときりがないが、適切な分量と手順を守れば手打ちならではのそばを作ることができる。子どもたちは「お父さんやお母さんに食べてもらおう」を、合い言葉に真剣に取り組んでいた。そばの生地を均等に伸ばしてなかったり、細く切ることができず、うどんやきしめんのようになった子どももいたが、食べる段階では保護者は通常より太いそばをみんなに見せながら和気藹々と食べることできた。また、そばアレルギーの人のために流しそうめんを用意した。幼少の子どもたちはそうめんが流れる様子を見たくて食べることを忘れて何回も流してほしいと大人に頼んでいた。

③ 大人のグループでの話し合い

大人のグループの話し合いは、参加者の自己紹介と近況報告から始まった。自己紹介をしながら吃音に対する疑問や困っている点なども質問として出された。

自己紹介の発言の中でよく聞かれたものは、吃音を子どもにどのように話したらよいかかわからないという疑問や、吃音について子どもに話さない方向へ逃げようとしてしまうという悩みであった。こうした思いは、多くの保護者に共通するものであった。なかなか吐露する機会のない疑問や悩みをオープンにできることや、お互いが気持ちに共感しあうことで、保護者たちは分かり合えるよろこびを感じることができると思われた。また、ある成人吃音者の保護者が「子どもがどもることに悩んでいることを、最近まで気づかなかった。一緒に（吃音を）理解して乗り越えたい。」と述べたように、分かり合う中から、悩みを乗り越えようとする力を得ることができると思われた。

子どもと吃音に向き合うことの難しさは教師や指導者からも語られた。これは教師や指導者同士が同じ点で悩むことを知り、お互いに情報交換する場の必要性を実感するものとなった。また、保護者も教師や指導者が真摯に取り組む姿を見ることで、家庭と学校が連携を深めることができると思われた。デイ・キャンプでは、保護者が教師や指導者と一緒

に参加するケースも少なくなく、話し合いで互いの思いを知ることを通して、信頼の絆を深める機会となっていると思われた。

参加者の疑問の最も大きなものは「吃音をどのように乗り越えるか。」であると思われたが、これについては、ことばの症状の改善だけが吃音の問題を軽くするのではないことを説明した。保護者や指導者の中にはことばの症状にとらわれている人が多く、研究会ではことばの症状のみに注目するのではない子どもの捉え方の重要性を指摘し続けている。このように経験や気持ちを分かち合うだけでなく、研究の知見や吃音の基礎知識など、吃音の勉強も話し合いに取り入れることで参加者がより客観的に吃音をとらえたり、誤った考えに気づいたりできるように配慮した。

また、保護者の子どもの将来に対する不安を和らげるものに、成人吃音者の体験に基づいた話があった。「やむをえず話していくうちにだんだんと自信がついてきた。」と前向きに吃音をとらえている姿を実際に目にするすることで、自信をもった保護者の意見も聞かれた。これは、ある父親の「どもってでもいいから話す経験を積ませたい。」という意見からも感じ取ることができた。

さらに、保護者にとって力になると考えられたのは、年齢が自分の子どもより大きな子どもをもつ、いわば先輩の保護者の経験を知ることであった。たとえば、5年生の吃音児の母親が、子どもを信頼してさまざまな経験を積ませていく中で子どもが成長する姿を見たという体験談を話した。この話は今回のデイ・キャンプに参加した2年生から4年生の子どもをもつ保護者にとっては、とても身近な話であった。このように、保護者や指導者が、成人吃音者や先輩の保護者からの体験談を通して、子どもの将来についての見通しをもつことの重要性が感じられた。

④ 子どもの話し合い

子どもの話し合いに参加したのは6名の吃音児であった。すべて男児で4年生が2名、3年生が1名、2年生が3名であった。

進行役の教師が一人と成人吃音者一人とが、子どもたちとともに円形に椅子を並べて座り、さいころトークというゲームから話し合いの時間は始まった。さいころトークとは、さいころを振って出た目の数に指定された簡単な質問に答えるというゲームであった。この場合の指定された質問は、吃音と関係ない、たとえば「将来なりたいもの」などの一般的な話題であった。子どもたちがさいころトークで話すことに慣れたのを見計らって、進行役が吃音の話題に話し合いを転換した。

まず、子どもに「話す時にどんなことで困ったか。」を尋ねてみた。2年生のAは友だちに何を言っているのかと言われることがいやだと答えた。2年生のBも、「馬鹿じゃないの、ほんと人間なの」などと言われて「心が嫌になる。」とそれに同調した。3年生のDは「『し、し、し、新幹線』って言ってしまう時に何がし、し、し、新幹線やと言われる」

と述べ、まわりがからかって真似することに対する苦痛を明らかにした。4年生のEと2年生のCも真似されることが最も嫌だと答えた。これらの発言から、どもることが不自由であるという思いよりも、どもることで、まわりからからかいや、ばかにされた扱いを受けることが嫌であるという思いが強いことがわかった。

また、どのような時によくどもると感じているかを尋ねたところ、子どもたちが最も困難を感じているのは、本読みや発表などの授業中の課題ではないことがわかった。むしろ、本読みや発表などよりも、友だちとの会話の際に吃音を苦痛に思っていることが多かった。おそらくこれは、からかいなど、普段の生活ではまわりから吃音に対してネガティブな反応を受けることが多いからではないかと考えられた。さらに3年生のDは、発表などの際には「がんばってやってみたら、できるようになった。」と話していた。これは、発表などでは、たとえ吃音が見られても、教師などから課題を達成したことを肯定的に評価されることが多いため、吃音が苦にならないのではないかと思われた。こうしたことから、子ども自身の苦手意識は、達成感や肯定的なまわりの反応が影響していることがうかがわれた。

子どもたちには、成人吃音者が自分の子どものころを例にしながら、ことばの症状が変化してくることや、同じようにどもる仲間は大勢いることを話した。この話題の中で、首を振る随伴症状の見られる2年生のBは、「『ふ』の音を言うと、首を振っちゃう。」と自分が随伴症状に気づいている発言をした。また、3年生のDと4年生のFはどもり易い音を意識していることがわかった。これは、個人差はあるものの、子どもも小学生になると自分がどのようにどもるのか、いつどもり易いかなど、吃音の症状について具体的にわかり始めることを示していた。また、成人吃音者が吃音の症状は大人になると変わってくることを話すと、驚いた反応を示す子どももいた。

どもる仲間がいることについての話題では、3年生のDは、「テレビでどもる人が多いことを知って恥ずかしくなくなった。」と話した。これは子どもであっても、仲間がいることを知ることによって安心できることを示していると思われた。しかし、一方で2年生のDは、自分と同じように随伴症状のある成人吃音者の話を親から聞いて、随伴症状が改善されなければ「大人になったら最低なことになる」と、随伴症状を恐れる気持ちにつながったことを話した。このように他者がどもる症状を見たり、聞いたりすることにより、かえって自分の吃音を否定する気持ちをもつ可能性もある。他者の吃音の例から自分への自信を回復するには、吃音を肯定的にとらえる考え方を同時に示す必要があると思われた。

以上のように子どもたちの話し合いでは企画者の予想以上に、子どもから吃音の話聞くことができたと思われた。2年生のAに関しては、学校のことばの教室でも吃音について話すことに取り組んでいるが、ことばの教室担当者の報告から、今回のグループによる話し合いの方が多く発言していたことがわかった。仲間がいることで吃音について話すことへの抵抗が弱まったと考えられたが、特に今回のデイ・キャンプでは、自分の吃音のこ

とを積極的に話そうとする2年生のBの存在が、他の子どもたちに影響したと思われた。話題への興味の程度や吃音の意識の程度には個人差があることが明らかであったが、それぞれが他の子どもの意見を聞いて同調する姿が見られ、このような話し合いの意義が示唆された。

(4) 第11回デイ・キャンプの参加者の感想

参加した保護者や子どもから、デイ・キャンプの感想を聞いた。それらには、「午後の話し合いで私の妻を含め、吃音者の親がこれほど悩んでいるとは思ってもみなかった。無関心すぎたような気がしています。」「皆さんの気持ちを聞くことができ、私ひとりが悩んでいるのではないことがわかり、気が楽になりました。」「大きいお子さんをお持ちのお母さん方のお話をお聞ききして、小学2年のわが子は、まだ、スタート、出発点にいるんだなと感じました。」など、他の親から影響を受けたという感想が多く聞かれた。さらに、「いずれわが子が吃音のことで悩み始めた時、いつでも話し合っていける親でありたいと思った。」「吃音はしゃべり方に個性があるだけだと思う。」など吃音と前向きに付き合う必要性が、参加者に理解されたと考えられた。

子どもの感想はさまざまで、「他にももっている子がいた。」と保護者に話した子どもがいた一方で、保護者と電車に乗って参加できたことが最も楽しかったと話す子どももいた。一度だけの話し合いで、子どもたちに仲間がいることを意識させるのは難しいと思われたものの、すべての子どもから「楽しかった。」との感想が聞かれ、吃音に向き合って話すことが、子どもたちに嫌な経験として印象づけられなかったことは明らかであった。

3. まとめ

「第11回吃音児のためのデイ・キャンプ」を通して、子どもが吃音を受け入れ、吃音とうまくつきあっていくための支援を行う「岐阜吃音臨床研究会」の取り組みについて紹介した。

研究会の構成要員は3種類であることが分かる。それらは、吃音をもつ子どもの集まり、吃音をもつ子どもの保護者の集まり、吃音児の指導に関わる教師や指導者の集まりである。研究会のメンバーである成人吃音者は教師・指導者とともに活動している。

これらの3つの集まりは、それぞれ次のような意味をもつと考えられる。吃音をもつ子どもの集まりでは、子どもたちが集団指導を受ける場となる。保護者の集まりは、親の会と称されるようなセルフヘルプグループである。教師や指導者の集まりは吃音児指導に関わる者の職能団体である。そしてこの3つのグループの目的は、子どもたちが吃音とうまくつきあって生きることを支援する点で共通している。通常、こうした集まりは独立して存在することが多い。吃音の問題に限定すれば、100人に一人という高い出現率をもつ言

語障害にもかかわらず、それぞれが独立して存在することは難しいのが現状である。これは吃音という問題が、例えば不登校のような何らかの目に見える状態を呈さない限り、保護者にも教師にも、社会的な支援が必要な問題としてとらえられにくいことが関わっていると思われる。それぞれが独立して存在できない問題点はあるものの、3つの集まりが同時に活動することはお互いに学び合うことができるという相乗効果がある。われわれの研究会が吃音の問題への有効な支援を模索する段階であることを考えると、こうした効果から得るものは多いと思われる。

吃音に悩む子どもは多い。しかし、本当に子どもが吃音に悩む10代半ば過ぎには、子どもや親は援助の場が身近になかったり、吃音について気持ちを閉ざしているケースが多いものである。研究会の活動が吃音児への支援の在り方を示していく中で、保護者や教師・指導者のマンパワーを確保し、思春期の子どもたちの支援へと活動が広まっていくことが期待される。

「中・高校生の吃音のつどい」の実践報告

豊島区立池袋小学校 松村玲子

1. はじめに

日頃の指導の中で多くのことばの教室担当教諭が、未だ指導方法が確立していない吃音指導に難しさを感じている。そして、その課題を解決するために、吃音の研修会に参加したり、実際に吃音の方々の話を聞いたり等、努力をしている。

ことばの教室担当教諭が東京言友会と出会い、双方の必要性が一致し「中・高校生の吃音のつどい」（以下文中では「つどい」と表示）を立ち上げて、今年度で9年目を迎える。

ここでは「つどい」の活動を紹介し、「つどい」に関わるスタッフや参加者、そしてことばの教室担当教諭の思いに触れてみたい。

2. 「中・高校生の吃音のつどい」の立ち上げ

「つどい」の開催については、以前東京言友会のメンバーのみで立ち上げた実績があるが、長期継続せず中断したという経緯がある。東京言友会としても思春期である中学生や高校生が吃音について話し合う場を確保したいという思いがあった。一方、ことばの教室担当教諭も吃音児が小学校卒業後に相談できる機関が無いことに疑問を感じ、何らかの形で相談できる機関の必要性を感じていた。そして、東京言友会の方とことばの教室担当教諭との出会いがあり、双方の「つどい」の必要性が一致し、「つどい」が発足することになった。

- ① 吃音者自身の体験から中学生や高校生の時期は精神的自立期であり、吃音についての悩みが深まる。
 - ② 吃音児の場合は吃音が改善されて小学校を卒業する例は少なく、卒業後の相談機関が必要なのに相談する機関が少ない。
- の2点が「つどい」発足の主な理由である。

3. 「中・高校生の吃音のつどい」の活動

(1) 第1回「つどい」の開催（平成10年5月31日）

スタッフ10人（東京言友会会員、ことばの教室担当教諭、研究者）で、準備を進めた。準備の打ち合わせでは、はたして中・高校生当事者が一人で参加するであろうかという意見が出され、先ず良き理解者であってほしい両親を対象とした会にしようという計画を立てた。名称は「吃音児をもつ両親のつどい」だった。内容は、「吃音の基礎知識の学習」「体

「体験談発表会と質疑応答」「グループディスカッション」で、参加者は10人（親御さんの内訳は、小学生3人、中学生4人、高校生以上3人）だった。「グループディスカッション」では、各グループに東京言友会会員とことばの教室担当教諭が加わり、話し合いを進めた。

(2) 第2回以降の「つどい」の開催

① 実施時期と内容

第1回「つどい」後の話し合いで、年間3回の「つどい」を開催することにした。第2回目は中・高校生の参加も募り、演劇鑑賞とシンポジウム、そして午後はグループ別の話し合いを行った。「つどい」の名称は「中・高校生」だが、吃音への早めの取り組みは重要と考えて小学生の参加も受け入れることにした。第3回目は、午前中は料理教室、午後はグループ別の話し合いを実施した。発足から2年後には、8月に2泊3日あるいは1泊2日のサマーキャンプを実施するようになった。

年間の実施内容は、次表の通りである。現在9年目で、通算34回実施している。

| 実施時期 | 実施内容 |
|------|--|
| 6月 | オリエンテーリングと吃音についての話し合い *時に、全言連関東ブロック大会と連動して開催した。 |
| 8月 | 〈サマーキャンプ〉 吃音についての話し合い（マンツーマン・グループ） *宿泊数はその都度話し合って決定した。宿泊のメリットは、話し合う時間が十分確保できること。 |
| 11月 | 体験談発表と吃音についての話し合い *体験談はスタッフが輪番で発表する。 |
| 3月 | 料理教室と吃音についての話し合い *調理メニューはスタッフの特技を生かして決定したこともある。 |

☆初めて参加する方もいるので、参加者の緊張をほぐして打ち解けられるように、毎回エンカウンターゲームを行っている。ゲームの内容によっては、自己表現の場にもなる。

☆それぞれの「つどい」では、後日参加者に感想文を出してもらい、「つどい」を実施する際の参考にした。

☆話し合いグループは、小学生、中学生、高校生、保護者のグループに分けている。

② 実施までの準備

この準備活動は、スタッフにとっては報告や意見を伝える貴重な経験の場である。

「つどい」実施後、スタッフはメーリングリストで反省文または感想文を流し、ミーティングまでスタッフ間で情報が共有できるようにした。「つどい」実施後の2回程のミーティングでは、「つどい」の反省と次回の「つどい」の計画、案内状の発送作業を行った。

実施間際には、スタッフ間で分担して案内を送付した方へ電話をし、参加の有無を確認した。その際、可能な状況で近況報告を聞くことにしている。

発足当時のスタッフは、前述した方々であったが、2～3年後には、高校生として参加した方がスタッフとして「つどい」に関わるようになり、その後新しいスタッフのメンバーが加わるようになった。また、関心をもたれた大学生やことばの教室担当教諭がスタッフとして途中参加するようになり、スタッフとしての役割や意識の持ち方についての疑問が上がるようになった。また、「つどい」を開催する意義や吃音の基礎知識の必要性が話題になった。そのために準備活動の他に時間を設定して勉強会を行った。「つどい」の意義については、項目4で詳しく述べたい。

「つどい」毎にスタッフの中からリーダーを決めた。決め方は立候補や推薦などであるが、年間1回はリーダーを担当するようにした。リーダーは、「つどい」の日程や役割分担表、お誘い文も含めた案内状の作成など「つどい」の計画案を作成し、ミーティング当日の進行役を行うことになっている。スタッフは、「つどい」後半の話し合いグループの担当が決まると、グループ毎に話し合いの進行について事前の打ち合わせをしている。この事前打ち合わせでは、参加者が吃音について話し、向き合えることができるよう工夫することを心がけている。

前述したが、実施後の反省会では、事前にメーリングリストで流した反省内容を基に話し合い、担当したグループの子どもについて事細かな観察やその時々への対応を伝えあっている。子どもへの対応に困ったこと、事前の相談が不十分だったこと等「つどい」での話し合いの難しさを感じさせる報告や、リピーターで参加している子ども達の成長を実感させる報告がある。

③ 「つどい」の案内と実施計画の例（後頁に参照資料として掲載）

4. 「つどい」の意義

「つどい」のもち方について、スタッフは大学生以上であることとミーティングに参加し準備段階から「つどい」に関わること、話し合いではまず参加者の気持ちを聞くことを「つどい」への基本姿勢とした。

また、実施を重ねる中でスタッフの入れ替わりもあり、新しいスタッフの新鮮な視点から「つどい」を考えてみようという声も上がった。その時のあるスタッフから「つどい」の意義についての報告があり、スタッフで共通理解を図った。

その主な内容は、スタッフの視点から考えた「『つどい』の3つの魅力」と題された。

魅力1：人間関係形成

- ・エンカウンターゲーム、オリエンテーリング、料理教室などでのレポートの形成
- ・参加者が安心して話せる、あるいは話を聞ける場と時間の提供
→悲しみ、怒りなどの感情表現ができるように、またそれを受け止めるよう

魅力2：参加者の疑問や悩みに積極的に応えるアプローチ

いわゆる「consultation」相談

- ・吃音の基礎知識講座（親向け、子ども向け）の必要性
→スタッフは最低の知識を有している必要がある。定期的な勉強会、自学自習

魅力3：自己洞察

- ・参加者が新たな知覚を獲得し自己洞察・自己認知に至るように関わる

いわゆる「counseling」

- 最も重要なことは共感と傾聴
作文の試み（つまり「ものがたる」ということ）
スタッフにとっての体験談発表

5. 「つどい」に関わって；スタッフや参加者の思い

スタッフからの反省や参加者の感想文の中から、吃音や「つどい」に関わって感じた思いを抜粋して紹介したいと思います。

(1) 吃音当事者として

① スタッフの立場から

- 小学生グループを担当した動機は、小学生が苦手だからです。以前のサマーキャンプで小学生と1対1で話したときにどう接すればよいのか分からなくなっていました。これではいけないと思い、今回克服するつもりで小学生グループを選びました。後半の話し合いでは聞き手に回ってしまい、遊ぶこと話すことにどうも抵抗を感じ、積極的に接することができなかったことが一番の反省でした。しかし、今までの中で一番楽しかったような気がします。
- 事前に打ち合わせしたのにも関わらずエンカウンターゲームでは、司会・進行がうまくいきませんでした。自分のテンションを上げることができず、自分のどこかで恥ずかしさや照れがあったと思います。申し訳ないです。今回のつどいで感じたのは「責任」でした。参加者の気分で参加しており、気持ちが中途半端でした。
- 今回のサマキャンは自分にとって色々な点で大きな経験になりました。まず、一つが初めてリーダーとして参加したことです。自分の未熟さを痛感させられましたが、やれば出来ないことはないという小さいながらも自信になりました。二つめがマンツーマンで親御さんの話を初めて聞くことが出来た点です。小学生グループの話し合いは、なかなか

かうまく進めることが出来ませんでした。その中で小学生が自分の吃音について話をしてくれると妙に嬉しくなりました。もっと色々な話を引き出したかったなと思います。

○《体験談の発表》

私は数年前まで吃音をととても悲観的に考えていました。(中略) 高校3年生の夏、初めてバイトをしました。(中略) 気づくとその中の一人の友達と何でも話せるようになっていました。その友達は体の一部分に障害を持っていましたが、とても明るく、前向きで、私はそのエネルギーを沢山もらいました。その頃から自分が吃音者ということは勿論、吃音の相談ができる友達が増えてきました。そうした中、私は吃音で得をしている事も考えるようになりました。得をしていることの一つがこの中高校生のつどいです。つどいに参加して様々な経験をしたり沢山の人の出会えたことがあります。(中略) 今では、吃音のことばかりではなく、恋愛・学校生活・将来のことなど相談できる大切な仲間がいます。自分が吃音でなかったらこんな出会いは無かったでしょう。(中略) 確かに吃音をもっていて辛いことや苦勞することはあります。だからといって損をすることばかり考えていたら、一度しかない人生を悔いだらけの人生にしてしまいます。大切なことは今自分のもっているものでどれだけ大切なものを得ているかなのだと思います。これは吃音に限ったことではなくその他のことにも言えることなのです。そういった気持ちは嫌なことを受け入れることの第一歩だと思います。私はその一歩を踏み出しているところです。

② 参加者の立場から

○私は言友会には何回も参加しているけど、言友会は「吃音を持っているからあまり話したくない」時も、周りはみんな吃音を持っているから、いっば一話せて、「また来たいなあ」と毎回思います。あと、小学生グループでの話し合いでは、いつも参考になる事とか教えてもらったり、いやな事を言われても、がんばっている子を見るとがんばろう！！という気持ちをもたらします。中学生になっても高校生になっても、ずーっと参加したいです。

○私は集いに行くのがとても楽しみです。友達と遊んだり話し合いをしたりするのがとても楽しいからです。この前の餃子とおやつはすごくおいしかったです。あの後、家でも餃子を作ったら、みんな喜んでくれました。初めて参加したときは、自分以外にも言葉がつまっている人がいて、びっくりしました。お母さんが「みんなもがんばっているんだね」と言ったのを聞いて、そうなのだと思います。これからも集いにたくさん行って、たくさんのお友達を作りたいです。みんなと遊んだり、悩み事を聞いてもらったりしたいです。

○話し合いは人数が少なかったなので、いろいろ話しやすくちょうど良い感じの人数でし

た。時間がアツという間に過ぎました。「もっと時間があったらいいなあ」とも思いました。普段友達には言いにくかった吃音のコトをいろいろしゃべれたので良かったです。ザツダンも入ってけっこう盛り上がったし、楽しかったです。今回も行って良かったと思えました。

- 私は、いつもどもることを恐れて、言い換えをしたり、口を閉ざしたりしていました。このつどいではいくらどもっても大丈夫なんだとわかってはいましたが、それでもやはり、どもるということに抵抗がありました。(中略)でも今回の集いで、私はふとした拍子に、頭に浮かんだ言葉をそのまま、どもりながら言ってしまいました。(中略)思ったことをそのまま口に出すってこういうことなんだ。言い換えをしないで言葉を発するって、こんなにも気持ちのいいことなんだ。その時を堺に、(中略)どもらないことを第一前提にしてしゃべっていたことが、ひどくもったいないことに思えてきてしまいました。しかし、今もどもらないことを第一前提においた喋り方は変わっていません。だからもちろん、例の爽快さを感じることもありません。どもることは恥ずかしい、苦しいだけだという考えのもとで、毎日を過ごしています。(中略)しかし、今度の集いでは、言い換えを意識して、言葉を発してみたいと思います。
- 久々に参加しました。自分の不安だった事を聞いてもらえて、それがあまり心配なくていいことだということを知りました。それだけでも、参加した意味があった、参加して良かった、と思えました。(中略)本当に吃音に悩んで、わらにすぎる思いで集いに参加した人は、吃音の悩みを聞いて欲しいと思います。書いてる今、思いました。だからといって、クソ真面目にするのもどうかと思うし、楽しい方が良くと思います。しかし、楽観的な吃音者だけが楽しめるような集いではいけないと思いました。
- 「言友会に行ってみない?」。STの先生と母に勧められました。でも、吃音の方々には失礼なことですが「自分を見ているみたいで嫌」という気持ちと「気持ちを分かってくれたい」という二つの矛盾した気持ちがあり、2回のチャンスを逃がしてしまいました。(中略)会場に行ってみるとびっくりしたことは、今まで吃音の方とは2人しか会ってなかったことでもあります。こんなに幅広い年齢層の人、沢山の吃音の人が来ていたことです。特にこんなに吃音の方っているんだなと思いました。(中略)グループの話し合いでは、今まで吃音の人の悩みを聞いたことが無かったので、初めて「私だけが思うことではないんだあ」「そうなんだよねー」と共感できることがあって、少し嬉しかったです。(中略)もっともっと頑張ろう!もっと強くなろう!と思いました。自分の反省では、まず「つどい」では飾らないありのままの自分で話し合いなどできるようにしたいと思いました。いつもは友達と話してもあまり吃らないのに、「つどい」の時はすごく吃りました。周りが自分と同じ吃音の人ばかりで安心したのかも分かりません。自分でも不思議でしたしびっくりしました。あんなに沢山の人の前で吃れたのも初めてでしたし、今までにない開放感?「スカーッ」としました。STの先生と約束はし

たものの「つどい」に参加しようか悩みましたが、「約束して良かった。自分を追い込んで良かった」と思っています。

(2) 保護者として

- 吃音が治れば、それにこしたことはありません。でも、吃音があってもそれに負けないでほしい。吃音の子を持つすべての親御さんの願いだと思います。これからも、皆さんとのつながりを大切にしながら、子どもも私も成長していきたいです。
- 皆さん、とても明るく、いきいきと、楽しんでいらっしゃるということでした。高校生や大学生の方々は、スタッフとして活躍されて、小さい方たちはゲームを楽しんでいて、その「輪」「和」「話」が自然体で素晴らしかったと思います。(中略) 今まで我が子とは言葉のことを問題にしたことはありません。言葉のつかえも個性だと、普通にやり過ごしてきました。しかし、今後、独立して社会に出て仕事をして行く上で、必ず困難な問題にぶつかるだろうと危惧しています。今は大学受験に、親も子も一生懸命なので、晴れて大学生になった暁には、じっくり吃音の事を話し合ってみようと思います。そして言友会の集いにも参加して、同年代の方や先輩の方と交流させていただきたいと思います。
- 体験談を子ども達は何を思いながら聞いているのだろうといつも思います。また、親御さんは何を思うのでしょうか。私は集いを憩いの場であると考えます。吃音者がほとんどいない日常で、がんばっている人々がホッと息をつける数少ない場所ではないでしょうか。スタッフの方の「どもってもいいんだよ。一人じゃないんだよ」。この言葉がいつも心に響きます。親の話し合いでは、同じように悩んでいる方の話を聞いて共感し、そして励まされ、大変有意義な時間を過ごせました。
- 先日のつどいは、私と我が子にとって、驚きと安堵感の入り混じったものでした。我が子の周囲にどもりの子がいないため、「なんでうまく話せないのかな」と言っておりました。そんな問いかけに私はうまく答えることができず、「つかえてもいいんだよ」と答えるだけでした。そんな我が子にとって、自分と同じ吃音の子供さんたちと出会ったことが、まずは大きな収穫だったと思います。特に、高校生や大学生のスタッフの皆さんが、どもることを全く気にせずにつどいを楽しむ姿を見て、我が子は心が安らぐのを感じたようです。帰りの電車の中で「言葉がつかえることをどもりって言うんだよ。すごいどもっていた人がいっぱいいたね」と楽しそうに話していました。(中略) これからは「どもってもいいんだよ」という言葉を、これまでより自然に言えるような気がします。また、どもりについて我が子と率直に話し合える関係になるための第一歩になったと思います。内気な我が子が初対面の子とあんなに元気に遊ぶ姿は、私にとっては意外なものでした。おそらくどこかで心が安らぐのを感じたんだと思います。つどいの後、どもることが目に見えて少なくなりました。これには家内も不思議がっております。

す。ただ、あまり日々の状態に一喜一憂せず、長い目で見ていきたいと思います。

(3) ことばの教室担当教諭として

- 中学生グループの話し合いで「中学生がそれぞれ心の内にある吃音への感情に気づくためにはどのような場を設け、どのようなことばを添えていけばよいのか」を考えながら中学生と接していきました。「大切なのは大人が答えを出してあげるのではなく、その子自身が自分で気づいていってくれること。答えはいつもひと通りではなく、人が違えばその人なりの対処の方法や向き合い方も違う。強引に答えを誘導し、事なかれ主義のように片付けたつもりでいる姿は教員によく在るみたいだけれど、本当の解決にはならないのです」というスタッフのことばに衝撃を受け、今までの自分の姿を恥ずかしく思いました。
- 担当児童の参加がやっと実現しました。正直言って参加が決定してからというものの不安な毎日でした。会場までの道のりなど「参加したことが、よかったのだろうか」などずっと考えていました。でも、スタッフの方々や参加された皆さん方の生き生きした活動を見させていただいて「吃音に向き合っていきましょう」といつも言いながらいちばん向き合っていなかったのは私だったのではないかと思いました。ことばの教室ではこれからもゆっくり時間をかけて吃音について話し合っていきたいと思います。
- 初参加で緊張して臨みましたが、スタッフ皆さんの、「受け入れよう」とする思いを感じ、一日通して「ありのままの」自分が出せたと思っています。話し合いも、素直な気持ちで参加できたと思っています。活動をし、体がほぐれると心も連動してリラックスできること、話し合いや資料による「自己を肯定」していく生き方・考え方を学ぶこと、吃音をもつ「先輩」がそばにいることによる安心感、(中略)一日の中で私自身が学びの時間でした。濃い一日でした。(中略)これからの2学期の仕事について、考えます……。吃音をもつ子ども達と「吃音」について一緒に考えながら学習していきたいんです。教師と児童、大人と子ども、というものを超えた「人と人」として。素直な気持ちで。恥ずかしい気持ちを隠すことをしないで。今回のように、あまり重くならないで話しやすい場としたいのです。そして、吃音を一生つきあっていく仲のよい親友のようなものという気持ちにしていきたいと。自然体で話ができるようになるまでには、ちょっと時間がかかりそうですが、でも、やってみないことには前進していきませんから。まだまだ私も勉強不足ですが、それを恥じるのではなく、「分からないことが多いけれど、一緒に勉強していきたいと思うから。だから、一緒に吃音について考えていこうね。」という私の気持ちと吃音をもつ彼らの気持ちを融合させながら発展していければ。彼らの時間を先まで考慮した上で、大切に「ことばの教室での学習」をしていきたいと痛感しています。そのための私自身の研修を、日々向上していけるように努めていきたいと改めて思った「つどい」の体験でした。「私にできること」を考えながら頑張っ

いきます。

6. まとめ

最後に「つどい」のスタッフや参加者の感想からくみ取れる事柄をまとめてみたい。

- ・スタッフは大学生以上が担っているが、スタッフを初めて経験する方は、緊張感や責任感を抱きながら、自分たちの役割分担を果たしている。「つどい」後のミーティングで情報交換をし、失敗や喜びを共有して、失敗を次に生かそうという思いをもち、次回の「つどい」につなげている。経験を重ねるにつれてスタッフ自身に積極性が表れ、スタッフの成長をお互いに認め合っている。
- ・この「つどい」に初めて参加した方は、吃っているのは自分だけではないと感じ「ほっとした」という思いを抱く。この思いは特に小学生に多いようだ。中学生になると吃音についていろいろなことを時間を掛けて話したいという感想が多い。また、吃音について真摯に考えたいという思いも抱いている。高校生では、吃音のことは勿論だが、それ以外のこと、例えば恋愛のこと、進学のことなど、話題の範囲が広がる。
- ・保護者の方の「治せるのなら、治したい」ということばは切実な思いであろう。しかし、「つどい」で見るスタッフ達の姿は、そのような思いを安心感に変えてしまうこともある。吃りながら活動するスタッフの姿に、自分の子どもの将来の姿をダブらせることもあるだろう。そして、焦らずじっくりと我が子とつきあっていこうと再確認する場となっている。
- ・ことばの教室担当教諭は、話し合いや体験談での吃音当事者のことばやスタッフとしての活動を通して、自分自身の指導のあり方や吃音観の再考を試みようとしている。担当している児童の将来像を思い描く糧になっている。

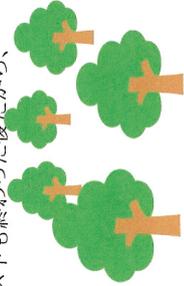
これらの思いは、吃音を通して語られたことであるが、吃音だけに限ったことではなく、吃音を核として、それぞれが生活していく中で、自分自身や周囲の人々について広く、深く考えていることに繋がっているであろう。

中高校生の吃音のつどいレクリエーション企画

オリエンテーリングと話し合いを楽しもう

緑も濃くなった6月。吃音を持つ中高校生や御両親の皆様、都心のオアシスでアウトドアを楽しみませんか？

- ★ 普段の悩みを忘れて広々とした公園で、人と楽しくおしゃべりしたり、お友達を作ったり、**ワイワイできる！**
- ★ 初めての人も、みんな同じ悩みを持つ仲間！ リピーターも久しぶりに仲間と会える！ **何でも話し合える！**
- ★ 日には6月5日（日曜日）。中高校生の中間テストも終わった後だから、**気がねなく遊べる！**
- ★ 交通の便も最高だから、**気楽に行ける！**



実施日 : 17年6月5日(日曜日)
 集合時間 : 午前10時30分
 集合場所 : 代々木公園 原宿門前
 JR線 原宿駅(表参道口) 下車徒歩 約1分
 東京メトロ千代田線 明治神宮前(出口2) 下車徒歩約3分
 ☆☆地図参照☆☆

参加費 : 無料
 持ち物 : 筆記用具、敷物(ビニールシート)、弁当、飲み物
 タオル、日よけの帽子

※終了時刻は4時半頃を予定しています。
 ※朝から雨の場合は、隣接する国立オリンピック記念青少年センターで行います。
 この時の集合場所は、後日ご連絡します。(昼食についても)

申し込み・問い合わせ先
 TEL: *-*-*-*-*-*-*-*-*-* (午後10時以降)
 E-mail: *-*-*-*-*-*-*-*-*-*
 --*-*-*-*-*-*-*-* 小学校ことばの教室
 TEL: *-*-*-*-*-*-*-*-*-* (午前9時~午後5時30分)
 FAX: *-*-*-*-*-*-*-*-*-*
どちらかにお願ひいたします。5月28日(土)頃までにご連絡下さい。
 Cf. 中高校生の吃音のつどい研究会
<http://village.infoweb.ne.jp/~tokyogen/koukou/>

【地図】 集合場所まで・・・

スナックのメッセ

「6月は梅雨、そしてつどいの時期。今度の舞台は代々木公園です！広々とした、緑あふれる場所で新鮮な空気を吸って、日頃溜まった心のモヤも吐き出してしまいたいよう。雨天時の場合も体育館が使えるので心配無用。日々、通り過ぎてしまっような自然とふれあう、純粹で導い心。そういったものを、同じ悩みを持つ仲間と分け合い、共有出来るとういいですね。」

「今度6月の中高生のつどいでは代々木公園にてオリエンテーリングを行います。6月は雨が少なく憂鬱な季節ですが、この時期の木々の澄んだ香りや草花の潤んだ色もまたいいものです。このつどいに来るのは皆、大なり小なり吃音に悩まされてる人ですが、それでもほんとに色々な人が来ます。そんな人たちと一緒に歩いて、話しをするだけで、自分一人で悩みを抱えるだけでは決して見つからない何かを得られます。スタッフ一同、参加を待っています。」

「6月のつどいは代々木公園でオリエンテーリングです。思いっ切り体を動かして、初めて参加する方もいつまでも来てくれる方も一緒に楽しんでみましょう。私が初めて参加したのがこのオリエンテーリングです。その中でたくさんの人達と仲良くなりました。普段の生活の中で感じる大きかったり小さかったりするシコリのようなもの。一人で悩んでばかりじゃなく、そのカケラでも誰かに伝えることが出来たなら、肩の荷も下りてうんと楽になることと思います。一緒に公園を歩いて、一緒に食事をして、一緒に話して、その中で自分を見つめ、自分を少しでも出していつてくれればと思います。この機会に是非ご参加下さい。お待ちしております。」

主催：中高校生の吃音のつどい実行委員会
 (全国言友会連絡協議会・東京言友会)

【6月5日の日程】

- ☆ 9:00 場所取りスタッフ、リーダー全員集合 (代々木公園原宿門)
- ☆ 9:30 スタッフ集合 (代々木公園原宿門)
ここで打ち合わせを行う。
- ☆ 10:30 *参加者集合 (原宿門) *各担当者が行う。
*道案内役、受付
*進行役
*はじめの挨拶
*日程の説明・オリエンテーリングの説明
- ☆ 11:00 オリエンテーリングスタート
*各グループともに地図と得点表を受け取り、スタートします。
*原宿門近くの時計塔がオリエンテーリングのスタートになる。
◎オリエンテーリング (各自荷物を持って)
・ポイントは4カ所。
①噴水池：植物のクイズ 担当：
②フラワーランド：日時計を読む、またはその他のクイズ 担当：
③バラの園：内容 バレーボール 担当：
④丘の広場：内容 大縄跳び 担当：
- ☆ 11:40頃 オリエンテーリングゴール (中央広場の時計塔)
ダイビングをする 担当：
*人数確認 (オリGリーダーが行う。)
*優勝チーム表彰
*昼食時の注意を伝えるのは冒頭で行うので、各スタッフに気を配って頂きたい。
*注意内容「中央広場あたりで昼食を取り、他にはいかない」
- ☆ 12:00頃 昼食。
*スタッフは参加者が一人にならないように声をかける。
*グループ行動を取る。
*弁当を持ってない参加者は必ずスタッフ同行で、売店へ行く。☆ 12:
- ☆ 12:30頃 集合・出発
*人数確認：話し合いGリーダーが必ず行って下さい。
*オリエンピック記念青少年センターに移動。
- ☆ 13:00頃 グループ別の話し合い

☆ 16:00頃 片付け

☆ 16:15頃 全体会 進行担当： 写真担当：
*センター棟の前の広場で行う。

☆ 17:00 終了 喫茶店誘導担当：

【雨天時について】

- *集合場所は、オリエンピック記念青少年センター入り口とする。
- *スタッフの集合時間は、9:30体育室になりました！
- *体育館前の受付 担当：
- *体育館までの誘導に入り口付近で2名立つ。(担当：
- *全体会は、屋根のある場所です。リーダーが当日探します。
- *雨の時に限り、体育室にてエンカウンターゲームを行います。

